

〇〇もんずら

注文の多い料理店

某月某日新花巻駅に集まったグループが、昼食を食べるところを探していると…ありました。【どなたもどうかお入りください。

決してご遠慮はありません。】山猫軒

そうでした。花巻といえば、あの宮沢賢治でした！

童話のあらすじは、こうでした。



しまだむつこ：絵

東京から来た二人の西洋かぶれの若い紳士が登場する。——ぴかぴかする鉄砲をかついで白熊のような犬を2匹連れて、狩りに出る。ところが山道を迷い、突然犬が倒れてしまった。「大損した」と嘆き、腹ペコで不安に駆られているところに、立派な西洋館が現れる。救われた気持ちで近づくと、「西洋料理店・山猫軒」の看板。玄関のガラスの開き戸に、金文字で、【どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません。】

「こいつはどうだ。やっぱり世の中はうまくできているねえ。今日一日難儀したけれど、今度はこんないいこともある。このうちは料理店だけれども、ただでごちそうするんだぜ。」

「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ。」

中に入ると、【ことに太ったお方や若いお方は、大歓迎いたします。】

廊下を進んでいくと【当軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。】

きっとメニューが豊富なんだと思ってさらに行くと、次々と霊験あらたかな指示が。

【身綺麗にして泥を落とせ】【鉄砲と玉を置け】【帽子と外套と靴を取れ】【金物を取れ】【クリームを塗れ】と進むうちに、最後に【体に塩をもみこんで】

「どうもおかしいぜ。」「ぼくもおかしいと思う。」注文するのは客ではなく実は向こうの方だと気づく。山猫たちが客を料理しようとする声が聞こえる。

「その、ぼくらが、……うわあ。」「にげ……」がたがたがたがた。

【さあさあ、おなかにお入りください。】鍵穴からは二つの青い目玉が…。そのとき！！

「ワン、ワン、グワア。」「ニャアオ、クワア、ゴロゴロ。」犬の声がして大騒ぎ。ふと気づくと、周りは何もない森である。脱いだ服や持ち物が木の間に散乱し、裸で震えている自分たちに気づく。西洋館は幻だったのだ。蓑帽子をかぶった専門の猟師が、「旦那あ、旦那あ」と近寄って救出。団子を貰って食べ、十円だけ山鳥を買って東京に帰る。しかし——。

宮沢賢治がこの童話を書いたのは百年前。久しぶりに読んでみると、現在を予告したかのような童話の内容に驚きます。毎日のニュースでは「金文字」の注文にどう応ずるか、幻の不安の影におびえる世界の姿が映し出されて……。

某月某日、かのグループは山猫軒で注文したそばを食べて、花巻東へ向かったとか。